



ビジネストーク

「水と緑にあふれる若さ」 次なるステージへ

頭取 大道 良夫

2024年の第79回国体は昨年7月、滋賀県での開催が内々定され、1981年(昭和56年)の「びわこ国体(スローガン・水と緑にあふれる若さ)」以来43年ぶり2度目の開催が事実上決定したところです。

国体は、約10日間の会期中に約40競技を実施します。開催基準に沿った施設整備や運営、選手強化などに多額の費用が必要だけに、大会終了後の活用や将来の滋賀のあるべき姿を見据えた計画立案が不可欠です。

県の「国体検討懇話会」は2012年5月に設置されました。私は、社会人になって9年目に開催された前回国体の熱気と興奮を思い起こしつつ、「再び滋賀で」とのワクワクした思いとともに委員として出席、議論に参加してきました。

懇話会の意見は「国体の開催そのものをゴールとして捉えるのではなく、国体開催を契機として、滋賀の活力をさらに高め、将来にわたり持続可能な共生社会をつくることこそを指すべきである」と集約されました。

さらに、「滋賀で国体を開催する際に掲げるべき目標」として①滋賀をスポーツで元気にする国体②滋賀の若者や女性が主体的に関わる国体③県民総参加でつくり、「滋賀の力」を伸ばす国体④滋賀の魅力を再発見し、地域の活性化やビジネスにつながる国体⑤滋賀の子が、滋賀で育ち、

滋賀で活躍する国体⑥滋賀の未来に負担を残さない国体、の6点が掲げられています。これらの意見は「検討結果報告書」として2013年1月、知事に提出されたところです。

そして今年5月26日、国体開催準備委員会第2回常任委員会で、懸案であった国体の開閉式と陸上競技の主会場が県立彦根総合運動場(彦根市松原町)に決定、総会で報告されました。

いよいよ本格的な準備が始まります。今後は、各種競技の開催場所の決定と施設やインフラの整備のほか、指導者の養成や小学生以上を対象とした選手強化など、行うべきことは山ほどあります。

一方で、主要施設は優先して早期に整備し、国体4年前の2020年開催の東京オリンピックパラリンピックに出場する各国選手の直前合宿に利用されれば、県内の子供たちが世界のトップレベルの選手の技と力を間近で見ることができ、国際感覚を磨く絶好の機会にも、と夢は大きく膨らみます。

第79回国体は、まさに滋賀県民と企業、各種団体、自治体が力をあわせて「6項目」の目標に沿ったものにし、県民すべての心身の健康づくりとともに、将来にわたって活力あるコミュニティの基盤づくりとなるよう切に願う次第です。

私も、国体の成功に向けて微力ながら尽力を、と考えております。